

さきがける 科学人

vol.107

Profile

宮城県出身。東北大学大学院環境科学研究科博士修了。博士(学術)。米国スタンフォード大学地球科学部エネルギー資源工学科日本学術振興会海外特別研究員、東京大学大学院数理科学研究科日本学術振興会特別研究員を経て、16年より現職。19年よりACT-X研究者。

Suzuki Anna
鈴木 杏奈

東北大学 流体科学研究所 助教

WakuWakuする 気持ちかすべての源

Q1. 研究者を志したきっかけは？

A1. エネルギーを生かして、みんながワクワクする社会をつくりたい

中学で進路を考え始めた頃、時代の流れに左右されず、ずっと必要とされるものは何だろうと考え、エネルギーに興味を持ったのが、この道に進んだきっかけです。学びを深めていくうちに、日本の資源を生かして人々がワクワクするような社会をつくりたいと思うようになりました。

専門分野は「地熱エネルギー」の研究です。地球の内部構造は解明されていないことが多く、興味深い世界です。地熱の流れは非常に複雑ですが、例えば「岩石の隙間を流れる熱水の流れ」を表す数式は、燃料電池やデバイス、毛細血管などの流れにも共通する部分があります。異なる現象も同じような数式で表すことができる点に数字の強さや科学の面白さ、奥深さを感じます。



留学時に訪れたイエローストーン国立公園

Q2. 震災の経験がもたらしたものは？

A2. 東北が自立するために必要なインフラの構築を目指して

地元も大学も東北なので、2011年の東日本大震災は本当に衝撃的な出来事でした。当時大学生だった私はボランティア団体を立ち上げましたが、そこで感じたのは東京の力を借りなければ立ち上がれない東北の姿でした。「自立した東北をつくる」。震災によって顕在化した社会問題に直面し、強くそう思いました。

その後、米国に留学し、離れた環境から故郷を見つめ直したとき、豊かな自然を活かすことが東北の自立につながるのではないかと考え始めました。超高齢化社会に突入した日本はネガティブな話題であふれかえっています。こうした状況を、日本の強みを活かしてポジティブなものに変えていきたい。健康な社会の実現には日本の資源であり、自身の専門である地熱・温泉を使えないだろうか。そう考えて立ち上げたのが「Waku² as Life」という活動です。

ワーケーションなどを取り入れた温泉地域での新しいライフスタイルの提案や、多様なステークホルダー同士の対話の場を設け、地域資源について意識変容・行動変容を起こすための活動を模索しています。

Q3. 今後の展開と目指す未来像は？

A3. クリエーターでありエンターテイナーとして活動の幅を広げる

「Waku² as Life」を通じて温泉地域の人々と関わったことで、研究に対する考え方が大きく変わりました。設計やデザインには「対象をどんな状態にしたいのか」という目的が不可欠です。これまで自身の研究では、「30年先まで使える地熱発電所を作る」といった開発側の立場で目的を設定していました。

しかし今では、「みんなが納得できる最大の地域資源利用は？」といった課題を社会に問い掛けながら、科学技術と共に目的を設定することの重要性を感じ、人と資源を結ぶ地域社会をデザインしていきたいと思っています。

ものを生み出すことや人を喜ばせたいという気持ちがあらゆる活動におけるモチベーションの源です。研究者という枠にとらわれず、ワクワクする社会をつくり出すクリエイターであり、エンターテイナーとして笑顔があふれる東北の未来をつくる活動を続けていきます。



Waku² as Lifeのイベントにて

リサイクル適性(A)
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

R70
百紙パルプ配合率70%再生紙を使用

JST news

September 2021

発行日/令和3年9月1日
編集発行/国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)総務部広報課
〒102-8666 東京都千代田区四番町5-3サイエンスプラザ
電話/03-5214-8404 FAX/03-5214-8432
E-mail/jstnews@jst.go.jp JSTnews/https://www.jst.go.jp/pr/jst-news/



最新号・バックナンバー